学べるゲラ

第66回

鎮守の森に抱かれて

※2020年11月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

おや？　先日の土曜のことだった。いつものように石神井公園（東京都練馬区）かいわいを散歩していたら、水川神社の境内にミントグリーン色のキッチンカーが出ている。ランチどき、都心のオフィスビルあたりならよく見かけるが、住宅街の真ん中、それも神社に現れるとは。「カフェトラック7　珈琲の樹」が屋号らしい。のぼりに＜淹（い）れたてコーヒー＞の文字がある。ありがたい。なにせコロナ渦でわが行きつけの喫茶店は時短になったり、客席を間引いて、どうにも落ち着かないのだ。秋晴れの下、コーヒーの香りを楽しみ、ほっとひと息。

室町時代の創建とされる神社にホップな「カフェ」が不思議とマッチしている。マスターの雨宮佑樹さんは七五三参りの帰りに寄る家族連れの接客に忙しそうだ。「平日は会社勤めですが、夏から週末だけ営業しています。いつか独立を、と考えていましたが、いきなり店舗は難しい、キッチンカーならできるかな、と。コロナで一歩踏み出せました。おすすめは、とろけたラクレットチーズをかけるホットドック、それにドリップでいれるコーヒーです」。なぜ神社で？　「それがびっくりなんですよ。キッチンカーのおはらいに来たら、神主さん、よかったらうちでやらないかってわざわざ声までかけてくれて」

まあ、なんとおおらか。その宮司、奥野雅司さんが社務所にいた。

紺の作務衣（さむえ）が似合う。「人と人が出会い、つながっていく場所になればうれしいんです。かつて神社は地域の中心にあったわけですから。私はあくまで＜まちの司会者＞、みなさんの後押しができたら」。そういえば、新春の季節、境内にちょっとしゃれた市「井のいち」が立つのを思い出した。公園のまわりに広がる石神井をはじめ、近隣の井草、井萩、大泉など水にまつわる土地でクラフトショップや飲食店を営む主人がこだわりのブースを出す。神楽殿でライブ演奏まである。この「井のいち」は私も耳にしていたが、休日はたいていゴロ寝のまくら人間ゆえ足を運びそこねていた。

「アハハ。それは残念。在宅勤務が多くなり、わがまち再発見の機会も増えてくるんじゃないですか」。語るのは「井のいち」仕掛け人の一人、クラフトギャラリー店主の町田顕彦さんである。「大きな池があるせいか、ゆるーい時間が流れ、ゆるーい空気が漂っている。好きですね」。そんな石神井を自転車で走り回る男がいた。ある日、ふらとギャラリーにもやってきた。野人の風貌ながらどこかシャイ。「何か一緒にやろうよ」。その男の真っすぐで熱い思いに打たれた町田さんは早速イラストレーターら仲間とエリアの魅力を伝えるフリーペーパー「井」を創刊する。文字通り市政の人による「井のいち」もこのネットワークから生まれた。

「はじめさん！」。町田さんらは懐かしそうにそう呼ぶ。すっかり「まち記者」気分の私は「はじめさん」に会いたくなった。２０１７年に66歳で他界したグラフィックデザイナーで写真家の田﨑はじめさんのことだった。残された膨大な本を「はじめ文庫」と名付けて妻の敬子さんが自宅で公開していると聞き、お邪魔した。居間に野人の遺影があった。「お盆に帰省するようなふるさと、東京人にはありません。夫にとっては

石神井こそがふるさとですから、わがまちを心地よくしたいという気持ちが強かったんでしょう。面白い人がいれば、ひょいと出かけ、うちで酒盛りもしょっちゅう。ポップの木のツタが2階まで伸びていて、台所の窓から実をつまんでは天ぷらにして振る舞っていました。居酒屋みたいにちょうちんをつるそうかなんて言って。僕は裏方でいいんだよ、が口癖でした」

大のジャズファンのはじめさん、学生の頃からライブを聴き歩いた。「うちでも寝ているとき以外、流しっぱなし。タイマーがセットされて、毎朝、ジャズで起こされましたよ」。ケラケラ笑っていた恵子さんがふと声を落とした。ジャズでわがまちを元気にと企画した「森のＪＡＺＺ祭」を目にすることなく旅立ったからだ。「とにかく病院ぎらいで、がんが見つかったときには手遅れでした。9月23日に亡くなる数日前まで病院のベッドで打ち合わせをしていました」。追悼公演になってしまったイベントは11月3日、文化の日に石神井公園の野外ステージで開かれ、ミュージジャン11組が集い、３０００人もの観客が生演奏に酔いしれたという。

ボンボボンボーン……。闇に包まれた森にベースの音が響きわたる。はじめさんが逝って3年、同じ文化の日の夜、氷川神社で4回目となる「森のＪＡＺＺ祭」があった。コロナ対策のため、野外ステージでの開催はあきらめたが、神社のはからいで会場を境内奥の「こもれびの庭」に移した。入場は予約制の75人限り。「井のいち」スタッフがいる。宮司もいる。敬子さんもいる。ステージを照らすライトのトラブルがありハラハラしたが、そこはチームワークで事なきを得た。壮厳な雰囲気にしばし身構えたが、軽やかなサウンドが心と体をスイングさせ、コロナブルーをほぐしていく。耳を澄ませば、虫の声。

「みなさん、お世話になってま

ーす」。いかにもご近所のあいさつをしたのはベーシストの小美濃（おみの）悠太さん。「大泉のライブで演奏していたら、はじめさんに誘われちゃって。僕たち地元のミュージシャンをすごく応援してくるんです。オリジナリティーのある曲がいいよって」。実行委員で、ペーパークラフト輸入代理業を営む石倉詩子（ふみこ）さんは「イベントの運営をめぐって侃々諤々（かんかんがくがく）やりあいました。私にとっては天敵だったかな」。ただその天敵の発した「シビックプライド（市民の誇り）」という言葉を覚えている。「正直、ぴんとこなかったんです。でも、はじめさんがまいた種が発芽し、イベントのたびにお手伝いします、と連絡をくれる方々がたくさんいる。今回のスタッフの働きぶりを見ていたら、これがシビック・プライドなのかなって感じました」

すっかり冷えてきた。ひらひら枯れ葉が舞っている。ウイルスに日常を奪われたまま、気がつけば、冬はすぐそこ。東京の感染者数はまたじわじわ右肩上がりになってきた。春、このまちのドラックストアでもマスクを求め、列ができた。スーパーの棚からパスタが消えた。メディアは社会をクールダウンさせられただろうか？　巣ごもりという孤立がまちを殺伐とさせなかっただろうか？　ジャズに身をゆだねながら、思った。その昔、だれもが不安なとき、まちの人は結びつき、鎮守の森に抱かれ、ときに音楽を奏で、祈ったのではないか――。

「一杯、どうですか」。森のコンサートが終わりを迎える頃、敬子さん、私に暖かいカップ酒を差し出してくれた。柄にもなく遠慮した。手弁当で奔走する同じまちの人を差し置いて駆け出しの「まち記者」は口などつけられない。ホップの実の天ぷらをつまみ、愉快に飲める日まで、もう少し歩かねば。